わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 44

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

スポーツ嫌い

サッカーだ野球だゴルフだと、とかくスポーツネタは人気がある。

特に今年は、サッカーのワールドカップがドイツで行われたこともあって、国をあげて観戦ムードに包まれ、スポーツが経済としっかり結びついている事実を実感させられたものである。このような状況下で、こんな発言をするのも勇気が必要なのだが、私はスポーツが好きではない。基本的にインドア人間で、小さい頃から家のなかで遊んでいるほうがずっと楽しかった。

いうまでもなく、学校の体育の時間は嫌で嫌で仕方がなかった。ドッチボールもバレーもマットも跳び箱もバスケットも、どれも苦手で居心地の悪さだけが記憶に残っている。まず、体操着に着替えるのがおっくうなのだ。なんだ、単にめんどくさがり屋なだけじゃないかと指摘されても仕方がないのだが、制服を脱ぎ、体操着を手にしながら頭をよぎることといえば、早くこの時間が終わればいいという、ただそれだけであった。

球技では、自分のところにボールが来ないことを祈ってビクビクしていたし、かけっこでは自分を追い抜くクラスメートの後ろ姿を眺めつつ、このまま走るのをやめてしまおうかと常に迷った。跳び箱は、はなから自分が飛べるわけがないとあきらめ、マットの上では堅い体を動かすのが妙に気恥ずかしくて泣きそうになっていた。

もともとひとり遊びが好きで、俗にいうお人形ごっこやままごとをブツブツとつぶやきながら自分なりに楽しんでいた。母親の話によれば、誰かが「遊ぼー」と誘いに来ても、それが嫌で、でも自分では断れる勇気がなく、母親に頼み帰ってもらっていたという。スポーツだけでなく人間も好きではなかったようだ。

スポーツの得意な人や運動神経のすぐれた人は、私にとっては勉強ができるより遥かにうらやましい存在であった。私にはない柔らかなからだとよく動く手足、はつらつとした笑顔や器用な動作。そのような人はひたすら輝かしく、また近寄りがたい雰囲気に包まれていた。

では体育の授業において、嫌なことばかりだったかというとそうでもない。

水泳で、50メートルのプールを2往復、つまり合計で200メートル泳ぐのを課せられたことがあった。どんな泳ぎ方でもいいし、速さを競うわけでもない。ただ、200メートル泳ぎきればよしといわれていた。当然水泳も苦手であったが、年配の厳しい女性教師には逆らえずしぶしぶプールに入りあたふたと泳ぎ始めた。途中でリタイアしようかとなかばあきらめていたのだが、どういうわけか気持ちが萎えることなく、そのまま200メートル泳ぎきってしまったのである。補習だったのか、プールにいたのは私ひとりだけであり、かえってそれが気を楽にしてくれたのかもしれない。ものすごく遅かったが、200メートル泳いだ達成感は確かにあった。いつも怖くて好きではなかったその教師が、プールからあがった私を褒めちぎってくれた。自分でもやればできるんだとこれまでにない自信が沸き起こり、本当に嬉しかったことを覚えている。

中学だったか高校だったかも定かでないが、すでに鬼籍に入っているであろうその教師のことと当時の水の青さだけは鮮明に私のなかに残っており、今でもスポーツが苦手な私の、唯一誇らしい思い出になっている。

イラスト・三浦義雄